

【研究論文】

保育学生と共に学び育つ時空を創る

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 徳本達夫

はじめに 一やや長いまえがき

小文は、本学の保育学生の学びの足跡をたどる中で学生と教員とがともに学びの主体と主体の関係を創造し続けることが学生の最善の利益に繋がり、結果として学生がいずれ相対する子どもの最善の利益の保障に繋がるという、当たり前のことを述べたものである。この「当たり前のこと」を具現化するには、相応の時間・精力・資金が必要になる。限られた状況下、それらを本来の目的に傾注するには、相応の動機がある。さらに、動機が絶えず質的に高まっていかなければ、儂い夢物語となる。

「3K」という理由で保育士資格を取得しても専門職に就職しない学生が3割以上いるような保育者養成校もある。潜在的保育士60万人。潜在的小学校教員数は知らないので比較検討することは不可能だが、60万人という数字は多すぎると思う。他方、本学の保育者就職希望者の就職率はここ7年以上、100%。ほぼ全員が保育専門職をめざして学ぶ大学というのは稀有で貴重な存在である。その分、本学教員は、初発的な動機付けの段階で苦勞することは相対的に少ない。本学の縦と横の人間関係の中で学生が上学年生や同学年生の学びの足跡を真似びながら一人ひとりが自己形成を続けてきた成果である。大学として、学生の自己形成に最適な助成的な介入を心してきた成果でもある。

学校の教員の仕事は、「学生が学びながら生きていく空間を作ること」である(内山節『哲学の冒険』)。教員としての専門的な仕事をするには「全体の奉仕者」として、国民全体に責任を負っている者としての当然の営みである。しかも、一般論ではなく、所与の学生を対象に「ひとしく、その能力に応ずる」という、個別具体的な実践を通して責任を全うすることが任務である。

「教員にとって、子どもが見えることがすべてである」とは、授業の権化、斎藤喜博の至言である。大学教員にとっても同様である。学生が見えることから授業が始まり、教育内容が決まり、授業上の創意工夫が生まれる。遠近ともに将来を見通して、「学生が現在を最もよく生きる」ことを保障することである。18歳を越えた学生は、子どもの権利条約に謳われている子どもの権利を保障される対象ではない。だが、条約が謳うように、条約は保護・便宜供与の対象としての子ども観から、権利行使の主体、社会参加する権利を有する子ども観へと大きく転換した。学生は、そのような子どもの最善の利益を保障する責任を持つ専門職を目指す学生である。それゆえ学生自身も、権利行使の主体、社会参加する権利を十全に発揮して自ら学び続ける存在であることが期待される。言うならば、すべての社会構成員が「平和で民主的な国家および社会の形成者」になり続けるために「人格の完成をめざし」て学ぶことが権利であり、義務であるような時代を生きている。環境汚染をはじめ、拡大する格差という不平等、エネルギー問題、等々、人類が共同で解決するしかない難問が山積している時代を生きている。乳幼児期の保育の質が重要な鍵を握る。

すべての先なる者は、後から来るものから問われる。「何業を為したか。為しつつあるか」と。ここには、保育文化としての「育つ」「育てる」「育ちあう」という関係が脈打っている。問い一問われの関係は、お互いに当てにし、当てにされる関係であり、「孤独と連帯依存」(大田堯『教育とは何か』)の関係を生きることでもある。

日々の学びはたとえ微力で全体からすればごく一端であるとしても、最終的には人類の課題の解決

に繋がる営みである。このことを自覚して取り組む時空を創造する責任を先なる者は持つ。学生一人ひとりの学びの質保証は集団としての学びの質保証と対である。個と集団の力学を念頭に大学教育・保育者養成教育の質保証を具体化し続ける作業の中で教員も学び育つ。手応えは多々ある。

以下、学生の学びの質が高まりを見せた一つの契機としての保育学生研究大会への参加の記録と、大会参加前後の学生の実態、大学授業のあり方等について一つの叩き台を示す。中国四国保育学生研究大会は、保育学生の質の向上と親睦を意図して始まった研究実践の交流の場である。本学も参加してきた。そして、ここ数年、年々、活発になっている。結果として学生の学びは活性化している。研究大会参加効果である。他流試合効果でもある。その貴重な学びを共有するための一文である。時間の都合もあって、一部の学生の感想のみを掲載した。パソコンへの入力時間がなかったためである。

資料1. 2年生の研究発表要旨

保育学生が切り開く学び

一 学ぶ意欲の変化一

広島文教女子大学 初等教育学科・人間福祉学科
前田憲子・牧野正子・清岡小貴・山本祥子・槇島千秋・
高橋優歌・住吉晴香・重田雅子・原咲子

I. 研究の動機・目的・方法

乳幼児虐待・保育待機児童・教育格差等、乳幼児保育をめぐるさまざまな課題がある。子どもの最善の利益に反するこうした課題を解決する方向で事態を切り開いていく学びが保育学生には必要である。

子どもの最善の利益を保障する質の高い保育には質の高い保育者が必要である。そのためには将来の保育者として学生時代から質の高い学びを続けることが求められる。家庭・地域との連携、保育の社会的地位の向上等も含めて、このような問題を社会全体で考え、解決していく必要がある。

質の高い学びはどのように実現されるのか。大学入学後、学生としての意欲はどこまで高まったか。どのような授業が質の高い意識を生むのか。これらの問いは、どのような保育が子どもの最善の利益を保障することになるのかという、保育者として子どもに関わる際に問われる問いである。以下、保育学生としての共同研究者の経験や意識、実習での学び等を交流する中で明らかにする。

II. 研究の内容

1. 保育の現実との出会い

質の高い学びは、質の高い出会いから始まる。例えば、2年4月、後述する授業Cで見た映像資料に映る子どもとの出会いである。その子どもは、保護者（母親）の事情で24時間体制の保育園に通っており、母親と過ごす時間は非常に少ない。

私たちは、当初、子どもがかわいそうという気持ちと同時に、親の無責任さが許せなかった。しかし、その社会的背景等も踏まえて考える中で母親の無責任さだけを批判しても意味がないことが理解できた。そのような状況にある子どもの最善の利益を保障するには、社会的観点からの対応が必要となる。保育所による保育を保障し、その子どもが現在を最も良く生きることに繋がる社会的仕組みを創り出すことが必要であることが理解できた。

この子どもとの出会いが保育学生としての学びの意欲を高めるきっかけとなった。今までになかった新しい考えを知ることができ、真剣に考えることで質の高い学びができた。このような出会いを繰り返し、自分だったらどうするか、と常に自分と置き換えて考えることで、質の高い学びができ、質

の高い保育へと繋がる。そして、このような経験を積むことで保育学生としての自覚が高まる。私語をしないなど、保育学生全員が学ぶ意識を高める雰囲気づくりを目指した。

このような学びは、高校までの学びのように、教員の話に鵜呑みにし、書かれた通りに板書を写し、それを丸暗記し、テストで良い点が取れたら満足するという機械的な学びで得られない学びである。大学生として、自分自身が学ぶ主体になり、騙されない・流されない学びをすることでしか得られない。

2. 保育学生の学習意欲についての意識調査

9月下旬に本学初等教育学科幼児教育コース43名・人間福祉学科保育コース27名2年生対象に大学一年次と二年次での学習の意欲の変化について質問した（全員回答）。

「大学一年生の頃と比べて、大学二年生になってから学習の意欲は高まったか」に対する4段階評価の結果とその理由は以下である。

初等教育学科の学生で、「高まった」（35%）「少し高まった」（63%）と回答した理由を自由記述から明らかにすると、「専門科目の授業が増えた」（47%）「観察実習を経験した」（18%）「現在の学びが保育に繋がると実感でき、授業が楽しくなったと感じる」（2%）などを挙げた。「変わらなかった」（2%）と回答した1名の理由は、「自分の思っていた授業の内容とは違っていた」（2%）であった。

人間福祉学科の学生で、「高まった」（32%）「少し高まった」（60%）と回答した理由として「専門科目の授業が増えた」（42%）「興味があることが明確になった」（21%）「授業を通していろんな専門の先生と関わる機会が増えた」（8%）等を挙げた。「低くなった」（4%）と回答した1名の理由は、「将来について詳しく分からない」（2%）であった。

これらの結果から、学ぶ意欲には授業内容・授業方法が関係していることが分かった。

3. 意欲を高める授業のあり方

二年前期に3つの保育士科目の専門科目の授業を受けた。各科目の授業方法の特徴は以下である。なお、印刷教材を活用することは3科目に共通である。

授業A：①毎回のグループワーク②授業通信を通して平均10人程度の学生の授業に対する疑問や感想に対するフィードバック等。

評価と課題：この授業を通して、子どもを取り巻く問題について知り、考えることができた。全員が授業に参加し、自分の考えを必ず出し、グループ全体で意見を出し合った。このことにより個人だけではなくグループ全体で考えを広げることができた。

授業B：①毎回の小テストで基本的知識の定着を確認②小レポートの提出③具体的保育案の作成と学生相互の検討等。

評価と課題：この授業を通して、保育者として必要な保育の基礎を学んだ。全講義内容をつなげて保育案を作成することで授業の要点をつかむことができた。

授業C：①映像資料を活用した問いかけ②具体的な保育実践に対する自分の記述③平均20人程度の学生の授業短評に対するフィードバックを資料として配布④授業最終回の筆記試験の実施と解説⑤事前・事後学習の提出とフィードバック⑥絵本や新聞記事等の課題の提出と解説等。

評価と課題：他の授業と比べて視覚的に物事を見る機会が多い。視覚的学びと教員からの専門的な学びの両方があることで、主体的に学ぶことができた。また、授業中に学生が書いたコメントを読み、それに対する自分の意見をノートにまとめることで他者と自分の考え方の違いを知り、自分の幅が広がることで学びが深まった。

4. 幼稚園観察実習(4日間)との関わり

2年生9月の実習体験を通して、実習と授業は繋がっていることが分かった。授業で学んだことを実習で実感できた。授業Bでは事前に保育案の作成を行ったことで現職保育者のそれと比較できた。授業では主に指導案作成の形式を学んだが、子どもの実態が明確ではなかった。現職保育者は子どもの実態を十分に理解した上で保育指導案を作成していた。

授業Cでは常に当事者意識を持って学んでいたことで子どもの立場、実習生の立場に立って物事を見ることができた。実習では、大学の授業以上に当事者意識が求められる。それぞれの子どもの状況に応じた適切な対応をするには、よく考え、判断して行動することが必要である。家庭環境や生育歴、個人差等の視点をもって子どもを理解することの大切さも実感できた。

常に当事者意識を持って、それぞれの授業の特徴を生かした学びを通して、総合的に保育の現状を理解し、保育の実践的な力を身につけることが必要になることが分かった。

Ⅲ. 研究のまとめと今後の課題

保育学生としての学ぶ意欲を高めるためには、学生の学びの質を高めるような大学の授業内容と展開が必要になってくる。質の高い授業とは、学生と教員がともに子どもの最善の利益を保障する責任を自覚して学び合う主体同士の関係になって行われる授業である。

このような学びを通して、子どもの最善の利益を保障する保育学生としての学びが生まれる。保育士不足が世間では話題になるが、潜在的保育士は60万人いるという数字がある。保育の仕事の魅力にするためにも、保育士の待遇改善とともに、質の高い保育を実践していく専門的な知識と、豊かな人間性を身につけることがこれからも課題になる。

今後とも、実習・ボランティア等の直接体験をはじめ、本や映像資料等の間接体験を通して、ともに学びあう学生として質の高い学びを続けることが課題となる。授業をきっかけに始めた新聞・絵本等の出会いは学びの原動力になっている。教育者に求められる資質である省察性・同僚性・協働性を授業をはじめ、日常生活で体験することも欠かせない。今回の9名による共同研究は、課題はあるものの、その第一歩となった。子どもが現在を最も良く生きるとは、保育学生にとってとも言えることである。

Ⅳ. 主要参考文献 ①厚生労働省『保育所保育指針解説書』(フレール館, 2008年)

資料2 中・四国保育学生研究大会に参加して

清岡小貴

今回、保育学生研究大会に参加して得られたことがたくさんあった。将来、いい社会をつくる子どもを育てるためには、まず私たちが質の高い学びをしなければならぬ。質の高い学びをした保育者から学んだ子どもたちは、きっといい社会をつくろうとするだろう。

研究をする中で、保育をめぐるさまざまな課題が出てきた。学生の間に自分がどれだけ保育の課題に目を向け、学ぼうとする意欲を高めることができるかでこれから先の学びは変わってくる。中・四国から保育者を目指す学生が集まりいろいろな大学の考えや発見を聞き、とても刺激を受けた。私たちはまた違う観点から保育を見たときにこういう発見もあるのだというを感じた。

いろいろな大学の研究を見る中で興味をもったのは、倉敷市立短期大学の人形劇だ。絵本だけでなく、演劇という児童文化にふれることで子どもたちに豊かな表現力や想像力、協調性を身につけさせるという考え方に魅力を感じた。視覚・聴覚からの学びは感じとれることがたくさんある。絵本とはまた違う魅力があり、子どもたちの心の中に自然に入り込める存在のひとつだと私は思う。

自分たちの研究の発表に対しての達成感は正直あまり感じられなかった。本当にあっという間に終わり、やりきったという気持ちにはならなかった。なぜ感じられなかったのかは、事前準備に問題があったからだ。他大学で何ヶ月も前から研究をはじめ準備をしてきた学生の発表は聞いていて惹きつけられるものを感じた。終わった時の発表者の表情は私たちとは全く違った。学びたいという思いを行動に移すか移さないかで、伝わってくるものは全く違うと感じた。質の高い学びとはどういう学びをしなければいけないのか研究大会に参加して改めて考えることができた。

今回、大会に参加して来年も参加したいという気持ちは強くなった。同じ目標をもった学生との関わりは、共通の話題が多く発表を聞いていて本当に楽しかった。来年は文教で開催される。開催校だからこそたくさんの文教主に大会に関わってほしいと感じた。

資料3 中・四国保育士学生研究大会に参加して

山本祥子

1. 全体的感想

私はこの研究大会に参加して、様々なことを学び、たくさんものを得ることができた。

初めに、研究大会に参加し、発表をするにあたり、自分の今までの学びを振り返ることができた。研究をするまではただ保育者になりたいから目の前の授業や課題をこなしていたように思う。まさに自分のためだけの学びだった。しかし、徳本先生を始め、9人のメンバーと主体的な学びについて、保育学生としての自覚を持つことについて研究を重ねていくなかで今までの私の学び方は間違っていたことに気づいた。保育学生として学ぶということは自分のための学び、単位の学びではなく、子どもたちのための学びだった。子どもたちがよりよい発達、成長をしていくためには子どもと保護者との関わりはもちろん、子どもと保育者との関わりも重要になってくる。子どもの最善の利益を保障するための学びが私たち保育学生に必要であるということが分かった。

しかし、研究を終えた今、子どもの最善の利益を保障する学びや保育というものを更に考えていかなければならないと思う。私はこの研究を通して新たな目標を見つけることができた。より良い質の高い保育を行っていくために日々保育について考えて行きたいと思った。

2. 質問の答え

「質の高い学びとはどのような学びか」について答えたい。

私にとって質の高い学びとは、学生が自ら学びたいという気持ちをもって取り組む学び、保育者になるという責任をもって学生が共に学ぶ学びであると思う。私の学びの出発点はまず、「保育者になりたい」という気持ちからであった。誰もが学びたいと思うとき、何か目的を持って学ぶ。学びたいと思う気持ちを持つことで学習に意欲的に取り組むことができる。意欲的に取り組むことで学びが深まり、さらに知りたい、学びたいという気持ちが生まれる。そうした連鎖を繰り返すことで質の高い学びとなっていく。

次に保育者になるという責任をもって学生が共に学ぶ学びである。私は二年生になり、保育に関わる専門的な科目を学ぶ中で保育現場の現状、現実を知った。私はこの現状を知ってこのままではいけない、このままでは子どもたちの前に立って保育をすることができないと感じた。この気持ちは自分だけではなく、他の保育学生にも感じてほしいと思った。保育を行うということはとても難しいことだと思う。だからこそ学ぶこと、質の高い保育を提供するために学ぶこと、子どもたちのための学びであると自覚できることで保育士学生同士の学びの輪は広がっていくと思う。

以上の2つが私の考える質の高い学びである。

3. まとめ

この研究を通して、自分の学びが振り返ることができた。そして保育学生として、保育者になる自覚を得ることができた。それは、大学入学前と今では保育者に対するイメージが全く違うからだ。なぜ学ぶのか、なぜ自覚をもたなければならぬのかというものが明確になった。そして、ただ学ぶというのではなく、子どもたちのための学びであるということであったからだ。子どもたちの成長の基盤となる乳幼児期に子どもたちと関わる保護者以外の保育者は子どもたちに園生活や家庭での生活の中に取り入れながら様々なことを教えなければならない。質の高い保育を提供していくために、ただ教えるのではなく、保育者が学生の頃から主体的な学びを繰り返し、子どもたちが主体的な学びができる保育を行っていききたい。

研究を進めたり、原稿を作ったりするなかでつまづくことの方が多かったがこの9人のメンバーで研究を進め、発表できたことが私のなかで良い経験となった。人数が多かったこともあり、全員で一緒に原稿を作ることはほとんどできなかった。そんな中で、個人個人の保育に対する思いや、学ぶ意味、主体的な学びについて意見を交わすことはとても面白かった。そんな中で、主体的な学びをするためにはまず自分が行動を起こしていかなければならないと感じることもできた。学ぶことは一人でもできる。しかし、様々なひとと意見を交わしていく中で自分には無い考えも知ることができる。私はそのような経験をこの研究を通して得ることもできた。

また、保育者を目指す他の大学の学生の発表を聞いて、保育学生として共に刺激を合いたいと思った。これからはこの学びを学年全体に広げることができるよう保育者になるという意識をさらに高める学びをしていきたいと思う。

資料4 中・四国保育学生研究大会2014に参加して 原 咲子

1 研究の成果・感想

今回、私は大学に入って初めて研究に取り組んだ。これまでの学びや自分自身のことを振り返る貴重な機会となった。計9人での共同研究だったとはいえ、研究は非常に大変なものだった。深く追求すればするほど自分の考えがまとまらなくなり、混乱してしまうことも多々あった。しかし、今回の研究を通して自分や仲間の考えが交わって新たな考えが生まれたり、自分の課題が見つかったりしたことで保育学生としての自覚がとて高まった。これは、大学で研究をした時・実際の研究大会で他大学の研究発表を見聞きした時どちらでも感じた。私たちは将来、現場で子ども・保護者・地域の人々に「保育」（または保育を通して家庭・地域の支援）を本気で行わなければならない。学びの段階にある今も、周りに将来出会う子どもの姿を想像し現場にいる気持ちで勉学に励む必要がある。つまり、学生には主体的な学びが大切となる。今回の研究は、このように当たり前のことだが見落としがちなことに気付かせてくれた。質の高い学びとは、当事者意識を持って学生・教員がともに意識を高め合い、化学反応を起こすことで考えを深め合う学び——この学びが常に出来るよう、私たちはこれからも努力を続けなければならない。

私は今回の研究の中で、正直何度も逃げ出したくなった。一つは、研究発表の他にも大学での授業、授業で出る沢山の課題、ボランティア活動など多くのことを抱え込んでいたからである。私は一つ一つの物事を自分の納得いくまで進める性格だが、つい「私がやらない」という意識が働いて複数のことを一度にやろうとしてしまう。もう一つは、思いや考えはあるがそれを言葉に表現するのに苦しんだからだ。伝えたいことが明確でないと相手には届かないため、どうして自分はいつも表現に苦しむのかと苛立つ時があった。そんな自分がどうして最後までやり通すことが出来たのか。振り返ってみると、研究を重ねていく度に「力になっている」と実感していた。授業でも「これは研究でも考えたことだ」と学びの共通性を見つけることが増え、友人と話している時に研究で学んだことを自分の考えとして伝えることが出来るようになってきた。研究と日常生活を切り離して考えるとどうしても気持ちを上向きにしにくい、それらを繋げて考えることで好奇心・探究心が湧いた。だから私は最後までやり通すことが出来た。

また、今回の研究を終えてとても達成感を得た。その理由として、一つ目はこの研究を通して物事をより自分のこととして考えるようになったからだ。先述のように、研究と日常生活を繋げることで学びが活きていることを実感している。二つ目は、仲間と協働して研究を進めてきたことで、教育原理で学んだ「省察性・協働性・同僚性」という教師に必要な3要素が保育者の立場でも求められていることが実感出来たからだ。現在「反省的保育者」という新たな専門家像が提示されているが、反省的保育者になるためには現段階から自分の学び・実践を常に振り返り、改善していくことが重要である。3要素を意識し研究に取り組むことで、保育学生同士で学びの意識を高め合うことが出来たのではないかと考えている。しかし、この学び合いはまだ一部の人にしか広がっていないのではないかと考える。初等教育学科・人間福祉学科全体に広がっていくことを願う。そして三つ目は、自分自身の課題を見つけることが出来たからだ。私はまだ、人前で質問

をしたり意見を発表したりすることに抵抗を感じている。また、他者との意見交換に自信がない。今後の授業や日常生活の中で克服していきたい。

この研究を通して、もっともっと物事を多面的にとらえられるようになるべきだと分かった。これからの学びに結びつけるよききっかけとなった。

2 質問の答え

今回の私たちの発表を受けて、「質の高い学びをするためにはどのようなことが必要なのか？」という質問を頂いた。質問者は他大学の2年生だった。私と同じ学年の方からの質問に驚きを感じたのと同時に、「自分もこのような人間を目指していかなければならない」と思った。

この質問を受けて自分なりに答えを考えた。質の高い学びをするには、まず自分自身の主体的に学ぶ意欲が大切だと考える。受け身の態勢で授業に出るのでなく、自分から「学ぼう」と思わない限り本気で取り組むことは出来ない。次に、仲間と協働して意見交換などの学び合いを積極的に行うことだ。自分の考えを持つことも大切だが、それを共有し合うことで他者の考えも分かり、新たな視点を持つことも出来る。「学びの共同体」を作ってグループワークやロールプレイを繰り返すことで、幼稚園教諭や保育士などの保育者という専門職に欠かせない「当事者意識」を高めることが出来るし、実践でも子ども・他の保育者・保護者などの気持ちを考えながら行うことが出来る。この「学びの共同体」は保育者に欠かせない「即興的思考（保育の現場で、その場の状況において瞬時に言葉がけや行動を考えること）」を身に付けるのにも大切ではないか。即興的思考を保育学生のうちから身に付けることは、保育学生の質の高い学びにも関わってくる。

最後に、常に自分や他の学生の学びを観察・省察し続けることだ。大学の授業で何度も学習した「PDCAサイクル」は類似しているのではないだろうか。この学びには、基本的な知識・技術をもとに、実践を繰り返す中で思考を深めながら多様な経験を重ね、自分の学びを振り返ることが大切である。

3 まとめ

研究を始めた5月から「主体的に学ぶ」ということに意識が向くようになってきた。それまでの私は、テストで好成绩を取るためや他者に認められるために真剣に取り組んでいた。受け身の姿勢で教師の言うことを鵜呑みにしているようでは、自分のため・子どもたちのための学びと成らない。もっと早く主体的な学びの大切さに気付けば、自ら考え能動的な学びが出来ていたのかもしれない。学びの捉え方によって自分の行動や考えがこんなに変わるものだとは知らなかった。主体的に学ぶことで自分の生活自体を変化させ、繋げていくことが出来る素晴らしい機会に巡り合えたことに感謝したい。今回は他大学の研究を聞いて振り返るだけで直接質問をすることが出来なかつたので、次回はぜひ質問にも挑戦したい。そして、今回学んだことを仲間同士で共有・意見交換し、来年はもっと沢山の仲間と研究大会に参加したい。

さて、来年度の研究大会は本大学で開催される。今回の四国大学の学生スタッフの素晴らしい対応、チームワークの良さを見て自分も運営に参加したいと強く考えるようになった。今回の研究で学んだ主体的な学び・行動をこの場で生かし、スタッフの中心として活動したい。ぜひ本学の沢山の保育学生がスタッフボランティアに手を挙げることを願う。他大学の保育学生と関われる貴重な機会になるし、自分自身の学びを振り返るよききっかけになるだろう。

今回の経験はとても良い経験となった。これからも、授業に主体的に取り組むだけでなく、保育の講演会を聴きに行ったり、ボランティアに参加したりして実践を積み学んでいきたい。保育学生としてもっと主体的な学びへと到達したいし、将来はその学びを実践で生かせるような保育者になりたい。

資料5 3年生の研究発表要旨

「ちがう・かかわる・かわる」保育を目指して —ぶつかり合いの事例から—

広島文教女子大学 初等教育学科3年
祥雲彩加 川元志織

I. 研究の動機・目的・方法

昨年度、保育学生としての主体的な学びについて研究報告する中で新たな自分に気付いた。大学の仲間と深く学ぶことで、より良いものを追求したいという思いが強くなった。真剣にぶつかり合う中で良いものは見えてき、生まれてくる。その中で自分の思いや新たな考えに気付く。そのような主体的な学びを続ける中で標題の「ちがう・かかわる・かわる」の意味を今回体験的に理解することができた。

この標題は、大田の教育哲学の基本である。もともと違う存在である一人ひとりが、さまざまな局面で相互に関わり合い、その関わりの中で共に自分の持ち味を発見する方向で変化する。この考えは、保育所保育指針がいう「子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」ことに繋がる。

今の社会はどこまで本音を言い合える関係があるだろうか。親子、友人、教育者と子ども、市民と行政など様々な関係において、最適な関係が築かれているだろうか。けんかをしても、とりあえず謝って終わるといったその場しのぎの行動をとっていないだろうか。逆に「モンスターペアレンツ」のように自己主張ばかりしていないだろうか。

保育の目標でもある、標題の保育を保育者としてどう創り出すか。以下、実習中の事例、自分たちの経験を中心に明らかにする。

II. 研究の内容

1. 具体的事例の検討

事例1. 女兒A・B（4歳）の言い合い

降園前の自由遊びの片付けの場面。AはBに「わざと押された」と言い、Bは「トイレに行きたくて急いでいたから押ししてしまった。でもわざとではない。」と言った。①互いに自分の嫌だった気持ちを隠さず、自己主張をすることが出来ていた。互いに気持ちを伝え合うことが大切だと思い、仲裁にあまり入らないようにし、子ども達の言い合いを観察することにした。このぶつかり合いは30分程続いた。途中、副担任が仲裁に入り、けんかの原因を聞き、二人の気持ちを代弁し、互いに謝ったら仲直りができるのではないかと提案した。そこで二人は謝り、言い合いは収まった。担任も同様の見解だった。担任からは「二人は自己主張の強い子どもでもある」と伺った。

考察：副担任の対応は、その後の降園準備と絵本・お話の活動を優先した対応だと推測した。だが、副担任の言葉がけでAは納得したのだろうか。このクラスではよくぶつかり合いをする姿が見られ、子どもが仲裁に入る場面、保育者が仲裁に入る場面などが見られた。それゆえ、女兒A・Bの言い合いはA幼稚園では特別な例でなかった。ここから下線部①

を続けることで、二人の自己解決が生まれたのではないかと推測される。

事例2.代弁を求める男児A（4歳）

B幼稚園のあるクラスでは、あまりぶつかり合いが見られなかった。降園準備前の時間に別の実習生が全員と手遊びをしていた時、Aが私のところに来て、「男児Bが押してきたからBに怒って。」と自信のない表情で伝えてきた。私は状況確認のために再度話を聞いた。そして、②直接Bに伝えるよう言ったが、Aは行かなかった。降園前のことであったため、二人が話す機会は作れなかった。

考察：Aは嫌なことがあっても自分で言えず、誰かに伝え、自分の気持ちを理解してもらうことで満足していたのか、あるいは、さらに解決まで求めているのか、その後の展開を作ることができなかったため分からない。

Aのように直接ぶつかり合うことが難しい子どももいる。彼らは思いを一番理解してくれそうな保育者や新鮮ゆえに話しやすい実習生に伝えているのだろう。その他にも、言いたいことを我慢している子どももいる。彼らが自分の思いを出せるように子どもとじっくり関わり、思いを受け止め、必要に応じて代弁することが必要である。代弁を契機に子ども同士がぶつかり合い、最終的に子ども同士の相互理解・自己解決に繋がるのが理想である。B園は思いを言葉で表現することを大事にしている。しかし、時間的・精神的に余裕がないと子どもの欲求を感知し、丁寧な対応をすることが難しい。理想的な保育の実現には、子どもの成長を待つ保育が欠かせない。

2.ぶつかり合いに対する保育者の対応

保育者の対応には5つの要素・段階がある。①心身に危険な場合には即座に仲裁する。②大人がすぐ仲裁に入り、子どもの納得の有無に関係なく謝らせる。③話を聞くが、待つことが出来ず、仲裁に入る。④仲裁に入り子どもが納得できるような言葉がけや関わりをする。⑤最終目的である子ども達だけで自己解決が出来るよう見守る。

様々な状況・条件の下、子どもの最善の利益に繋がる対応を考える上で、加藤が言うように保育者の保育観・指導観・子ども観・社会観が関係する。事例①②でいえば、事情が許す限り子ども同士が向き合い続ける状況を作ることが子どもの利益に繋がる。同時に保護者には、その大切さを伝える契機にもなる。

3. 保育学生Aの体験

(1) 幼稚園の年中時代：私は自分よりも気の強い友達Aに気持ちを伝えることが出来なかった。関係が壊れるのが怖く、気を遣っていた。ある時、私は自分の言葉で嫌だと伝えられず泣いた。そこへ先生が来て、じっくり話を聞いてくれた。その場にAもいて、その時に思っていたことを初めて自分で伝えた。Aの気持ちも聞いた。先生は2人の気持ちを理解し、代弁した。そして相手に伝えることができるよう手伝ってくれた。互いに自分の気持ちを伝え、相手の気持ちが分かった。(2) 母親との関わり：私の母は今でも学び続けている。そのため、私は母を誇りに思うが、その分プレッシャーや重さも感じている。大学入学後、将来のことや保育については母と一緒に話し合っていることが多い。しかし、日常生活に関しては、親の前で思ったことをはっきり言えないことがある。親の前ですら、正しい答えを考えたり、どう答えていいか分からなかったりすることがある。将来のことや保育のこと以外で悩みを相談したことが少ない。自分の悩みは「そんなこ

と」「考えすぎ」だと言われそうだと思っている。

下線部②の対応は保育学生Aの幼稚園時代の経験が土台となっている。以上より、一人ひとりの子どもの対応には家庭環境・成育歴・親子関係など総合的な理解と家庭との連携も含めた観点が必要になる。

4. 実習事後学習における保育学生の事例

教育実習の報告会で、グループ討議での結論を全体に報告した。質疑・応答の際、ある教員との間で思いのズレが生じた。思いを伝えようとしたが、自信がなく、結局言えなかった。それまでは、ぶつかり合えなかったことを悔しいと思わなかったが、一連の研究を通して、その醍醐味に気付いた分、悔しさが生まれた。自分の中の大きな変化である。

Ⅲ. 研究のまとめと今後の課題

ぶつかり合いが難しい要因・背景は、人と違うことを恐れる、自己肯定感が低いなどがある。大人が創る社会が、本音が言えない環境になっているからである。

子ども一人ひとり社会性や自己解決能力を育むためには、ぶつかり合いの経験が不可欠である。そのためには、保護者・保育者のみではなく社会全体が主張を受け止めつつも、お互いに自分の思いを伝えることが当たり前になることが必要である。それには対等な立場で信頼関係が築けていることが前提である。

幼児期にぶつかり合う経験を保障するために、一人ひとりの発達段階やその場の状況に応じた最適な対応をすることが保育者に求められる。子どもとの関係だけでなく、保育者・保護者の関係でも同様である。アトム保育所の実践のように、時間をかけた丁寧なぶつかり合いは深い相互理解を生む。保育専門家として求められる保育カンファレンスの力を高めるためにも保育学生時代から相互理解に繋がるぶつかり合いの経験を大事にしたい。

Ⅳ. 主要参考文献

①大田堯『教育とは何か』（岩波新書、1990年）②加藤繁美『対話と保育実践のフーガ』（ひとなる書房、2009年）③厚生労働省編『保育所保育指針解説書』（フレーバル館、2008年）④山田桂子『「待ち」の子育て』（農文協、1986年）⑤横川和男『不思議なアトム保育所』（太郎次郎社、2001年）⑥徳本達夫・祥雲彩加・川元志織「保育原理授業改革」『広島文教女子大学人間福祉研究』第12号、2014年、所収

資料6 保育学生研究大会レポート

川元志織

1. 保育学生研究大会に参加して

(1) 昨年に続いて、研究大会に参加した。他大の保育を志す人たちと関わることはなかなかない。そのため、今回もとても楽しみにしていた。私たちの発表内容を多くの人に伝えたいという思いから、緊張はあったが、気持ちが入った。同時に、私たちの思いに対して、聞いた人はどのように考えるのかとても気になった。

発表内容に対し、意見を聞きかかった。研究大会の前に、大学の仲間とぶつかり合いについていろいろな意見交換をしていた。他大学の学生や教員からも様々な考えがあると思っていたが、質問はなかった。私たちの伝えたいことが伝わらなかったのか。共感してもらえなかったのだろうか。研究はしたが、その場でぶつかり合いができず、残念だった。

他大学の教授による講評では、信頼関係をつくること、子

どもに寄り添うこと、子どもの目線になって考えることなどを実際に行うのは難しい、保育は何が起こるか分からないから、どのような子どもにどんなふうに関わるか、その時のその子どもに合った関わりが大切であるというような話だった。私たちの研究に対しては考えがよく分からなかったため、終わってから挨拶にうかがい、その時も少し話をさせて頂いたが、結局分からなかった。もっと食いがよければよかった。そこでぶつかり合いができなかった。

運営の問題として、研究冊子を前もって配っておき、質問時間を発表校ごとに行い、もう少し時間を増やし、もっと深くじっくり考える時間があれば変わっていたかもしれないと感じた。

(2) 他の学校の発表では、実践をふまえた研究で、とても興味深かった。ある学校では、自然を感じ、竹でウィンドチャイムやブランコなどおもしろそうなものを作っていた。私も作ってみたいと感じた。この体験をどう保育に繋げていくのかと考えた。発表者は自分たちだけでなく、地域の大人や子ども、たくさんの人々の憩いの場所となるようにという願いがあり、今はなかなか自然と触れ合う機会がない中で、とても貴重な取り組みだと感じた。また、子どもに自然の楽しさや素晴らしさを伝えたくても、自分自身が自然に触れ合い、物を作るなど体験していないと伝えられないと思う。

私は幼いころはたくさん自然に触れ合っていた。父が家の周りの森を使って、そりすべりができるようにしたり、ブランコを作ってくれたりした。竹で皿やコップ、箸と一緒につくことも体験した。だが、今は自然の中で遊んでいる子どもを見ない。私も今活動しているボランティアのキャンプや実家の森の中での生活を通して、もっと自然と関わっていきたいと思った。

パネルシアターについての研究発表では、子どもが楽しめるようにすることに加えて、食、命、生活など、実際の生活に繋げて考え、内容によってねらいや思いをもって行うことが大切だと思った。また、行う時に、子どもの様子、反応を予想しておくことも必要である。子どもが見て楽しむ、そして子ども同士で考え、それを生活のどこかに繋げていくことのできるパネルシアターを私もこれから自分の力で作ってみたいと感じた。

パネルシアターは私も実践したことがある。子どもたちが引き込まれるようなシアターにしたいという思いがあったが、子どもに何を伝えたいか、子どものどういう力を育てるかなど、具体的に考えてはいなかった。3年の後期の言語表現演習Ⅰの授業で始めたばかりで、私は今の時点では、子どもが楽しめるように、引き込まれるように保育技術や表現力を身に付けることを重視して行っていた。他のグループでは、見ていて引き込まれたものもあった。表現したり演じたりすることなど工夫がたくさんあった。その人たちは、どういう思いで取り組んだのか聞いてみると、1回目は自分達のことではいっばいだったが、2回目は子どもがまず楽しんで、そこから言葉を知ったり、イメージしたり、登場人物になりきって気持ちを考えたり、現実のことと結びつけて考えたりできるようにという願いやねらいを持って、全員で取り組んだと言っていた。それらの思いがありそれを形にしていたから引き込まれたのではないかと思った。

言語表現演習の授業では、パネルシアターをする際、7人のグループで作り出していった。私はその中で自分の意見を7割は出した。子どもが楽しめるようなより良いものを考え

て取り組んでいきたいという思いがあったからだ。このようなグループ活動で、かつての自分では言えなかったが、今では言えるようになった。だが、友達はあまり考えを発言していなかった。私も言えない過去があったため、言いにくい人の気持ちは分かる。だが、人と関わって理解していく時、伝えようとしなければ何も分からないし生まれない。また、その行動の理由は、現在の姿だけを見ても分からない。隠れているその人の情報や成育歴、どのような経験をしてきたかということ、その部分を合わせて相互理解になるのだと感じた。また、グループの中で意欲の差があると感じ、自分の意欲も低下してしまった。私はもともとと言える人ではない、取り組む上で自分の思いを伝え、他の友達はどのような思いでいるのか、お互いにそこから理解できたら、もっと違う取り組み方、仕上がりになっていたのではないかと思う。

実技の発表では、人形劇とパネルシアターを組み合わせた人形劇パネルシアターを見た。どのようなシアターになるのかとても楽しみだった。見てみると、学生はその登場人物になりきっていて、声の変化だけでなく、表情や動き方まで細かく演技されていた。声の高低だけでなく、スピード感や甲高さ、優しい感じ、怖い感じ、ゆかいな感じなど、表現に力を入れているようだった。子どもは表現豊かなものを味わったり触れたりする経験が必要だと思い、味わっていくことで、子どもの中に豊かなものがあふれていくと思う。私も同じ保育を目指すものとして、技術や知識を増やしていきたいと思った。

(3) 2年生の発表に対する、「質の高い学びとは」という質問について、発表が終わったあと3年生で少し話をした。私は、自分が主体的に学んだり、自分に置き換えて考えたりすることではないかと感じた。質の高い学び、質の高い保育をしていくことが必要だというのが、実際どのくらいの人がそれを目指しているのか。徳島市立幼稚園教諭の採用試験の二次小論文の試験出題にもなる程、保育の質の高さの問題は今とても重要となっている。自分には無理だと否定的になるのではなく、前向きに自分を見つめて、自分の考える質の高い保育、自分の保育観を確立していきたい。

研究大会に参加して、研究発表や実技発表を見て、自分にはない考えや表現力などを知ることができた。みんなのパワーに驚いた。自分には無理だと思わず、自分もあんなふうにやってみよう、こういう方法もあるのだと前向きにとらえることができた。一生懸命頑張っている仲間に出会い、私もさらに自分を磨き頑張っていこうと強く思った。

2. 研究を通して

(1) 今回研究発表に取り組む中で、自分自身を振り返ることができた。自分がどういう環境で過ごしてきたか、どういう体験をしてきたか、どういう教育を受けてきたかということが、全てではないが必ず現在の自分に繋がっていると考えられる。私は幼少期、現在を最も良く生きていたのだろうかと考えると、発表でもあるように、自分が出せていない時期もあった。それを思い出すことも、とても辛く苦しいことだった。

今回は昨年よりも深く考えていき、そのためには自分自身のことも振り返る必要があった。子どもへの関わり方1つにも様々な方法がある。その中で、なぜその関わり方なのか、それはその人の幼少期の経験や今までに学んだことが影響していると思う。だから、振り返ることは大切であり、学ぶことやその中身もとても重要なことである。昨年と今回研究を

ともにしてきた仲間も、自分自身を振り返り思うことがあったと思う。研究を通して、昨年は見えてこなかった仲間の今までの経験、育ってきた環境、人間関係など様々なことが見えてきた。過去はその人だけの問題にせず、一緒に乗り越えていく。もしマイナスのことだとしたら、未来の子どもには繰り返さない。ぶつかり合いをしてくと、ここまで深いところで関わることができるのだと感じた。

(2) 私が大事だと思うことは、自己肯定感を持つことである。人はみんな違う。その違う一人ひとりが違いを認めて相互に関わり合い、その中で変化していくということは、ぶつかり合いや相互理解をしないと得られない。ぶつかり合いはとても大切なことであり、ぶつかり合いをすることにより、相手を知ることができたり、自分の思いを伝えたり、受け止めたり、相手を理解したり、自己解決力がついたりすると考えるが、その前に自己肯定感がないとぶつかることができないのではないかと。すぐ、自分はダメだ、みんなできているのに自分だけできていないなどと思う人は、他の人と自分を比較し自分に自信が持てず、自分の考えを伝えることができないのではないかと思う。

私は昨年からの研究大会で発表してきたことで、以前よりも自分のことを認められるようになった。しかし、今でもまだ、自己肯定感の無さを感じることもある。今の時代、子どもが遊びを創りだしていかなくなっていると授業で聞いた。私自身もそうであると感じた。答えやマニュアルばかり求めてしまう。自分で考えることが苦手である。それは、常に自分の考えが正しいかを考えてしまっているため、きちんとした考えを述べなければと思い、自分の素直な考えが出せなくなっているからだと思う。上手く述べられず、考えることをせず、楽な方にいこうとしているときもあった。また、勝手に自分で比較している。勝手にだと自分は思っていたが、そうならざる負えない環境の中で生きてきたからなのかもしれない。それらのことが自分の考えに自信がない原因になっているのではないかと。そういう部分が、子どものぶつかり合いを避けたり、こうでないといけないと子どもに決めつけたりすることになってしまっていると思う。私はいつから周りの言うことを気にしてしまうようになったのか。自分もこのままでは、同じことを繰り返してしまう。負の連鎖である。自分と同じような子どもは増やしたくない。増やさないために、私はまず自分を変えていきたい。パネルシアターのところで言ったように、少しは自分の考えを出せるようになった。仲間とともに最善を求めていくために、自分の思いを伝えたり、相手の考えを受け止めたり、ぶつかり合いをしていく自分もいる。大学に入り、その大切さを知り、より良くなるように考えることが多くなった。それは苦痛ではなかった。また、仲間とどういう保育をしていきたいか、自分の中で何を大事にしているかなど考えることは、友達の見聞も聞くことができ、自分の中の保育に対する考え方の幅をひろげることになる。理論や思いがあっても実践できなければ意味がないとよくみんなが言う。自分もそう思う。だが、まずは、理論や思いをしっかり持つことが大切だと考える。そこがないと、いくら実践しても中身の無い、すかすかな対応になってしまう。そして、理論と実践が絡み合った保育をしていきたいと思った。今大学で共に学んでいる仲間は、これからの未来、同じ世界で働いていく。他にもたくさんの方が子どもの今と未来を考えていく仕事に就く。仲間として、気持ちを高めて合っていきたい。

(3) ぶつかり合いを通して人は成長する。ぶつかり合いに至っていない子どもが相互理解できるようになるにはどうしたら良いのか、保育者がどう支えるか、理論をもとに実践できるようにしたい。相互理解は子どもだけでなく、全ての人に言える。相互理解があって、平和な社会が成り立つのだと考える。平和な社会が成り立つということは、ちがう・ぶつかる・かわるというぶつかり合いができてこそ言えることである。大人にとって大事なことであるが、子どもにとっても大事なことであり、子どものころにその経験をしてきたかしていないかで、私のように大人になってからも影響することがある。相互理解の重要性を伝えていきたい。

資料7 保育学生研究大会を通して

祥雲彩加

1. 発表を通して感じたこと

(1) 今回は二度目の保育学生研究大会だった。昨年に引き続き発表者として参加した。今回のテーマは「ちがう・かかわる・かわる」保育を目指して～ぶつかり合いの事例から」という題で発表した。研究内容は昨年の研究から繋げたものである。プラスαの学びを重ねていくことで、互いに学び合うことで新たなものが見え、自分の中になかった考え方が生まれた。共に学び、互いに高め合うためには、ぶつかり合いをすることが必要だ、と気付いたことが今回の発表のテーマに繋がる。ぶつかり合いというテーマは身近にあるようだが、どのくらいの人があることを意識して生活しているだろうか。現在、ぶつかり合いを避けている人が多いように思える。なぜ出来ていないか考えたとき、人間形成の土台である幼児期にその経験をしていないことが原因なのではないかと気付いた。その経験をするためには保育者のかかわり・援助が必要である。そのために、保育者自身がぶつかり合いの経験をし、重要性を感じるべきだと研究を通して感じた。

研究当初は、思っていることを言えずわだかまりが残ることもあった。しかし、それでは互いの関係も深まらない。研究自体も浅くなる。そこで思い切って意見を言うと、相手のことを知れたり、新たな考えの発見があったりした。そのきっかけにより、大学の授業でも指摘し合うなど、抵抗なく意見を言うようになった。意見交流をすることもここではぶつかり合いだと捉える。ぶつかり合えばぶつかり合うほど相手のことを知ることができ醍醐味を感じた。一連の研究をする中でぶつかり合う、そして相互理解をするということを常に意識するようになった。

(2) 自分自身がぶつかり合いの経験をすることで子ども達にもこの経験を十分にしてほしい、という思いが強くなった。平穩に何事もなく過ごすこともよいが、けんかをしてぶつかりあって思いを吐き出すことが出来る方が良いと考える。けんかをその場しのぎの行動にせず、子ども達同士で向き合う時間をしっかりととることの重要性を感じる。

私たちは発表前に他の学生5名と教員1名でリハーサルを行った。その際、多数の質問・意見が挙がった。発表者と他の学生で互いに思いを伝えながらこの研究に関して真剣にぶつかり合い、相互理解ができた。そのため、会場での質問・意見はどのようなものが出るのか、このテーマについて、質疑・応答を通して深めたいという思いで挑んだ。しかし、実際は時間の関係もあり質問は出なかった。講師者は、私たちの発表を良く考えられた丁寧な発表だと言って下さったが、

指摘がなかったことに物足りなさを感じた。ぶつかり合いそして相互理解をするという研究内容だけに、心残りはあり、講評をして下さった先生に研究の不十分な点を含めてさらに指導・助言を求める位の積極性が必要であったと思う。

二年連続で研究をしたことで自分自身の成長を感じることができた。大学生活において非常に貴重な経験をした。

2. 他の発表を聴いて感じたこと

他大学の発表に関して言うと、実践から学んだことをテーマとして取り上げている大学が多かった。

一つ目は学生が竹林を切り開いて“HGBあかねの森わくわくランド”という広場を作っていた。自ら竹を切ったり細工したりするなど学生の力のみで行ったということに驚いた。創作の中には竹でブランコを作るなどダイナミックなものまであった。今まで遊べなかった竹林を遊ぶことの出来る広場にリメイクするという考えは素晴らしいと感じるとともに自分自身も実践してみたいと感じた。また、自然は自分の思うように作り変えるのではなくいかに仲良く付き合っていくかが大切だ、ということが印象的だった。

二つ目は幼児参加型のパネルシアターの創造と実践というテーマで研究をされていた。参加型ということを活かして絵が描かれている不織紙を触ったり、一緒に数を数えたりということがされていた。またその大学の付属幼稚園で実践しており、付属幼稚園教諭からの意見ももらっておられた。幼稚園教諭の指摘は方言や手遊びに関することばかりで参加型パネルシアターに関する指摘がないことが気になった。

三つ目は紙コップを用いた造形遊びにおいて大人と子どもの活動を比較するというテーマで研究されていた。紙コップを1万個使用して遊ぶという発想が新鮮で面白かった。また、子どもたちには紙コップを使って遊ぶことのみを伝えていたにも関わらず、紙コップ繋げてお風呂を作ったり、紙コップをはめ込みロボットになりきっていたり、創造力の豊かさを感じた。また、これこそ遊びなのだと思った。子どもがこのような遊べたのは、紙コップの数が多かったからなのだろうか、紙コップが少なかったらどんな遊びが生まれていたか気になる。私だったら大人との比較ではなく、対象は同じ子どもで紙コップの数を変えたときの遊びの変化の違いを研究してみたいと思う。また講評にもあったが、何かを比較するときは、予想を立ててから研究するとよいことに気づいた。

四つ目では、保育学生が切り開く学びというテーマで本大学の二年生の研究だった。質の高い学びとは具体的に何か、と言う質問があった。私も自分に問われたと思いながら考えてみた。質の高い学びとは、当事者意識で物事を考えること、鵜呑みにしない、現在を最もよく生きること、ぶつかり合い、相互理解、多面的な見方、などが挙げられるのではないかと考えた。質の高い学びが質の高い保育士へと繋がる。質の向上について再度考えていきたいと思った。

五つ目は、人形劇パネルシアター「いっぴきのオオカミ!!!」という劇を観た。私はこの舞台が今まで一番印象に残っている。大人も子どもも惹きこまれる人形劇パネルシアターだった。脚本もオリジナルであり、有名な「三匹のこぶた」と「7匹のこやぎ」を組み合わせたものになっていた。二つの話に共通する「オオカミ」と「父親の不在」に着目したストーリーとなっていた。いつも悪役なオオカミは、いい役へと変わっており、おおかみを父親のような頼もしい優しいキャラクターに描いていたところが印象的だった。子ども達に向けたメッセージが明確であった。また、演じ方も惹きつける

ような語りやセリフであり、それだけ伝えたいという思いが強いということを感じた。

今回は五つの発表を見させてもらい、どの発表も興味深く、保育現場で活かせるような内容ばかりだった。できるならば、全ての大学の発表を見たかった。

3. 二年間の研究を経て

(1) 二年間の研究を経て自分自身の成育歴を振り返る大切さに気付いた。小学校4年生の頃、仲の良かった三人グループの二人から無視をされ続け、とても辛い思いをした。私は、そのことが我慢できなくなり、嫌だった思いを泣きながらぶつけた。二人からも多くのことを言われ、大げんかになった。三人では収集がつかず、途中当時の担任が仲裁に入ってくれ収まった。初めての友人同士の大きなけんかだった。その後は、仲良く過ごしていた。

幼児期、小・中学校と人前に出ることが多く、どちらかというリーダーの位置だった。小・中学校では、クラスの中央委員をしており、クラス討議で意見を発言することが多かった。高校では、周りの友人が控えめだったことや男子が中心となっていることもあり、意見を発言することに遠慮していた。

また、幼児期、小・中学校と“いい子ちゃん”で過ごしてきた。上記で挙げたように多くの役員をしたり、勉強を人よりもしていたりすることで、先生、両親、友人から“偉い”“努力家”と褒められてきた。そのことに優越感を覚えることも多々あり積極的に行動してきた。決して周りの圧力が強いわけでもないが、褒められることに自分は良いことをしていないといけないのだと思うようになった。悪いことは絶対にせず、真面目に生きていくことが自分なのだと思っていた。しかし、高校時代では、今まで褒められ続けてきたことは反面、友人からけなされることが多かった。けなされる事に嫌とは伝えられず、そのことを笑って受け止めてきた。この時の自分は周りに否定されることが多かったため、悲観的であり、出来ない自分が嫌いだった。存在価値を見失うことが多かった。

(2) 大学では過去の自分を知る人がいないため、良く見られたい、高校の時の自分から変わりたいという思いで何事も一生懸命に取り組み、常に必死だった。大学では努力した分、結果に残ることも高校時代に比べては多く、周りからの評価も高かった。以前経験した、いい子ちゃん意識が次第に強くなってきた。

そんな中、大学二年時に「主体的に学ぶ、プラスαの学びをする」という研究に励んだ。同学年の学生の前で研究結果を発表した。学生の反応として“主体的な行動に尊敬する”“自分達も頑張ろうと思った”などの言葉ももらった。その言葉が自信となり、今後もこの気持ちを忘れずに学び続けていこうという気持ちになった。研究を終えてからも、学ぶことが楽しく多くのものを吸収したいという思いを持ち続けた。自己肯定感も以前より高くなっていった。やる気のある気持ちで毎日過ごしていたが、時には少し手を抜きたくなることもあった。息抜きもせずに進み続けることに苦しさを感じることもあった。しかし、発表をしたからには手を抜いてはいけない、頑張らなくてはならない、楽をすると他人から悪く思われそうで怖い、出来ない自分を出すことが怖い、という思いを抱き始めてしまった。これは、今までの多様な経験が影響しているのではないかと感じた。成育歴を振り返ることで見えてきたのである。これは主体的な学びとは言えない。同時にそのような思いを抱く自分に否定的になり、自己肯定

感が低くなった。学ぶことは楽しいと思っていたはずなのに、どこか苦しさを抱いていた。

(3) 大学三年になり保育研究発表大会についての話があり、発表をするかどうか迷っていた。先生方のアドバイスも受け、発表することが使命だ、というどこか自分の意思ではない部分と、発表することで自分自身を変えることが出来るかもしれない、という希望の気持ちを持って、発表することを決意した。研究テーマを考えていくうちに“ぶつかり合い”という言葉に出会った。それから、この言葉を意識しながら過ごした。ぶつかり合いとは、気の合わない人とけんかをするという考え方が強かった。できるだけ避けたいと思うことである。しかし、本来のぶつかり合うことの意義とは、自分をありのまま表現すること、ぶつかり合いを通して相手を知ること、質の高いかかわりをする、相互に理解すること、ということが分かった。ぶつかり合いはマイナスのイメージだったが、プラスになるための方法だということに気付いた。私はこのことに気付くまでは、どこか仮面を被って人と関わっていた。できる自分を演じる、だめな部分は隠す、他人から良い評価を得たい、という気持ちが強かった。そのため、作っている自分に虚しさや苦しさを感じていた。しかし、ぶつかり合いをすることで、ありのままの自分を受け止めてくれ相互理解にも繋がるのではないかと思い始めた。勇気を振り絞って、たまには息抜きをしたくなることもあるということを友人に話した。すると、抜くところは抜かないと逆に苦しくなるし、バランスが大切なのではないのか、という言葉ももらった。この時、肩の荷が落ちるような安堵感を覚えた。自己表現することで受け止めてもらえるということを経験した。そして今まで自分の体の中に刻み込まれてきたいい子ちゃん意識が少し無くなったように思えた。人からの評価を気にするのではなく、自分がどう生きるかは自分自身で選択すべきことに気付いた。評価主体が自分だということは、相互主体主義だと言える。このことが人格の形成を促すのである。自分自身がぶつかり合っていない、自己表現できなかった原因は、成育歴から分かった。将来、子どもかかわる際、その時の状況だけを見ている、何も見えてこない。隠れている情報の量と質を求めることや成育歴を見ることで初めて本当の部分が分かるのである。平和な世の中を作ろうとする共通の土俵がなくてはならない。

また、発表原稿にも綴ったように、討議すること、けんかを通して相手を知ること、理解すること、納得するまで意見を言い合うことなどと、ぶつかり合いを避けない毎日を過ごしてきている。今では言いにくいことでも、相手のことを思って指摘することが出来ている。自分にとっての大きな変化である。ぶつかり合いをする醍醐味を感じ、発言すること、自分をありのままに出すことに抵抗をあまり感じなくなり、自己肯定感も高まってきている。しかし、この思いが強くなりすぎて、相手の意見に傾聴する力が低くなってきており、相手の意見をすぐに受容するということが難しくなってきている。これが現在の課題である。自分だけが表現するのではなく、相手も同様に出すことがぶつかり合いの最終目標である相互理解である。今後はこの目標を念頭に置き、現在を最もよく生きていきたい。このことを自分が経験することは、保育者となった際、子どもと関わる上で必要になる。子どもの最善の利益を尽くすためにも、まずは自分が現在を最も良く生きようとする。

資料8 学生の学びの足跡への教員としての関わり

徳本達夫

1. 短大時代の研究発表 20年以上前、筆者は短期大学部学生の研究報告の手伝いをしてきた。3件である。いずれも、『幼児教育研究』に記録を残した。そのような体験は、その後、保育学生に関わる上での達成水準・要求水準となってきた。学生は諸条件が満たされると本人が気づかないほどの質の高い学びをする。それが本人の達成感・成就感となり、相対する子どもへの質の高い保育実践を生む。好循環である。

この姿勢は正規の授業の中でも心すべきことだが、小文で紹介する事例はいずれも、正規外にいえば、自主ゼミとしての取り組みである。授業の発展形である。

2. 自己の学びとしての研究主題 研究主題は常に最終的には保育者としての自己の学びに行き着くものとするのであった。短大時代の学生の研究主題も同様であった。

3年前に保育原理受講生に本研究大会のことを紹介し、参加を勧めるべく声をかけた。応答したのは、福祉学科の学生3名。学びの足跡をたどることによって、質の高い学びをするには、主体的な学び、能動的な学習が欠かせないこと、その一端となるものとしての授業ノート、関連課題への取り組み、等を基にした発表であった。保育志望動機の確認、大学生としての学びの姿勢、専門職としての保育職への進路へ向けての日常生活、等々、いわば、保育学生としての足元を確認しながらの研究であった。

翌年は、初等教育学科の2年生が発展させた。授業外の主体的な学びが質の高い学びを結果することを日常生活、人間関係、授業間のつながり等において発現していることを示した。研究のまとめは、『人間福祉研究』第12号、2014年(広島文教女子大学人間福祉学科)に載せた。

3. 二つの研究発表 本年は、2年生9名が資料のような研究に取り組んだ。3年生になった二人も昨年に続き、継続的な主題で深めた。資料のとおりである。

(1) 2年生の報告。結果として2年生自身は欲求不満が残っただろう。質問は想定質問。研究の元になる基本的な質問。当然の質問。正解にこだわった結果、回答に時間がかかったということか。日ごろから考えていることを自分の言葉で返す。これが質疑応答の際の基本。だから、事前に予想質問とそれへの回答を自分で考える。自問自答の正解を繰り返す。9人の共同研究ということもあって、他の8人に対する責任も過度に感じたためだろう。とりあえずは、責任者としての回答を伝え、補足があれば、他の学生のまわすという方式でいいのだから。これは、実習の報告会等で実施済みのこと。本番ゆえの圧迫であったか。

報告への他大学教授による講評はその通り。切り拓くという主題と大学授業との関係が大事という声もあった。

別の教授は、2年生の報告資料に目を通して、自分が授業者であったらどのような授業をするだろうか考えたという。それだけの影響力があった報告である。学生の学びの質を高めるために各教員はどのような授業を展開すればいいのか。常に、子どもの最善の利益の保障をめざす主体と主体との関係の中での作業である。教員としては、学生の学力が低い、意識が乏しい、などといった、学生への責任転嫁的な姿勢では活路は見出せない。そのような学生を育ててきた教員の一人であるだろうし、そのような社会を構成している一員でもある。それゆえ、社会的な責任を自覚した授業実践をす

る。これしかない。時事問題を常に意識した展開をすること、これは保育を社会的な時代的な観点から取り上げるためである。そのような感覚を形成するために新聞記事へのコメントを書くという課題があった。どこまで継続しているか。発展させているか。していない学生がいれば、その時点においてそのような状況にある学生だろうし、また、自覚を高めるための教員の授業への取り組みが不十分であるということでもあるだろう。引き続き、実践的な課題として取り組むしかない。

質の高い学びは自他を救う。今回の質問への回答例で言えば、保育者がいなくても、子どもが自分で自分の命を守るような学び、とでも答えることができる。2日前の授業で取り上げたことでもある。すべての学びや経験を総動員して応答する姿勢を持つ。これも質の高い学びをしているからこそのことである。

講評者とは同業者として、やり取りをしたい。

(2) 3年生の報告。報告の質が高すぎたのだろうか、質問が出なかった。時間不足であったことも大きい。他大学教員の講評のみ。

そこでは大田堯を研究の土台にしていたことが高く評価された。保育学生が大田を読むことはほとんどない。実際には、保育者たちが大田を高く評価しているにもかかわらず。現職保育者は読んでいるのだろう。私は、現職保育者の研修会等では、参考文献の中に入れていた。

講評の中では事例の数が問題とされた。卒業論文等で検討するならばそうだろう。しかし、ここでは子ども同士のやり取りだけが問題なのではない。保育学生として、自分の保育の土台にあるものを自分の成育歴等を振り返ることの重要性を強調したものである。

学生が自分のカンやコツ等で子ども理解をして、また、それを踏まえた対応をすることは保育を科学にするうえでマイナスになる。保育者の社会的地位が今なお、低いことの背景に、保育が学問的な土台を持って展開されていないことにあると思う。3年生の人間関係の授業の中で取り上げている、加藤繁美『対話と保育実践のフーガ』もそのことを重視している。理論の実践化であり、実践の理論化である。両者があって保育実践の質が高まっていく。それゆえ、理論的な学習が苦手だということでは、対人援助職である専門職にはふさわしくない。理論的な学習の必要性を実感して学び続けるしかない。又、そのようなことを実感できる学びの時空を創造することが教員と学生の双方に求められる。

現在はどうかだろうか。かつては、保育学生の中に、自分は学力が不足しているから、小さな子どもの保育を目指すということを言う学生がいた。幼児を相手にするのだから、小学校のように、勉強を教えるのではないから、という説明である。むろん、幼児保育教育は、小学校のように教科などを教える世界ではない。だが、保育自体を理論的に解明すること、自分の保育を論理的に説明すること、他者の実践との共通点と相違点を踏まえた上でよりよい保育を作り出ししていくための方向性を示すこと、等々は、いくら学力が乏しくてもなすべき仕事である。あるいは、『遊びこそ豊かな学び』という書名のように、遊びが持つ豊かな学びの質を説明する専門的な知識は必要である。あるいは、それを実際に展開する技術も求められる。技術は持っているのだろうか、それを専門的な観点から説明することなくしては、保育の仕事の質を社会に発信することには繋がらない。

二人は、本年も研究成果をまとめる作業に入っている。

4. 「学生が輝くとき」 かつて、児童文学作家清水真砂子が勤務先の短大生の学びや葛藤等の1年間をたどった作品を公刊した(『学生が輝くとき』岩波書店、1999年)。学生の成長を目の前にするという醍醐味は、呻吟しただけのご褒美でもある。無難なかかわりからは、極上の喜びは生まれない。当の学生も同様である。受動的な学びは喜びをもたらさない。「現在を最もよく生きる」という姿勢は、保育の乳幼児だけのことではない。その姿勢は「望ましい未来を作る力の基礎を培う」こととなる。大学生・教員も同様である。標題にこめた思いは、実践の中で具現化することによって魂が入る。

同時代を生きる者同士とはいえ、年齢差分の経験の質量をどう活用するか。学生と共に学び育つには、両者の共通の土俵が必要である。同時に、先なる者として、学生にとっての憧れの対象となることを目指す自覚が必要となる。

共通の土俵とは、子どもの最善の利益を保障する同志ということである。そのため共に上質の育ちと学びを追究する。結果として、憧れの対象となりうるであろう。「学生が輝くとき」は、「教員が輝くとき」でもあろう。順番としては逆だろうが。

避けるべきは、教員自身の学生時代の経験をそのまま学生に当てはめることである。経験は相対する学生の実態に即して応用的に活用されなければ、学生には受けとめられない。それゆえ、大学教育観・学生観は不易と流行の両面から常に問い直さなければならない。先なる者として、何業を為してきたか、為しえなかったかを、自問自答する姿勢である。時事問題への関与は当然として、「イチエフ」に象徴されるエネルギーの国家政策への関与、虐待やいじめ等の子どもや教育の現状への関わり、生活人としての日常のあり方、等々が3.11後は、それ以前以上に問われる。辺見庸『瓦礫の中から言葉を一わたしの<死者>へ』(NHK出版、2012年)が「死者にことばをあてがえ」と詩に詠んだように。

溝上慎一が『現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』(日本放送出版協会)を上梓したのは、2004年であった。本書で溝上は、「わが国、いや人類の歴史が始まって以来、ここまで人の主体的な活力を必要とし、それがなければ人生を形成できないという時代があっただろうか」(224頁)という。バブル経済が崩壊して、就職界が超氷河期に入った時代のことである。学生はそれぞれの時代相を抱えながら、生きて学んでいる。あるいは、飯島裕子・ビッグイシュー基金『ルポ 若者ホームレス』(ちくま新書、2011年)が指摘するように、若者世代にホームレスが広がっている。その引き金が自己責任を理由とする自己肯定感の低さである。

大学教員は、そのような時代や社会を作った責任分の仕事を、その背景や要因を明らかにしつつ、改善の方途を示し、行動する姿勢を持って学生への希望としての証を示す責任がある。先なる者であるがゆえに、共に学び育つとは、厳しい営為である。

5. 共に学び育つ時間と精力 清水真砂子が綴っているように、教員が関わった時間と質・量分の姿を学生は見せる。筆者にとって幸いであったことは、本学短期大学部で出会った学生たちと研究会に参加できたことであった。このことは冒頭で述べた。1年間の関わりである。表面的な関わりではない。内面的な課題を抱えている学生との出会いは、筆者にとっては研究会参加に伴う贈与であった。学生相互にとっても、同様である。学生同士の関係の中では深い部分ま

での関わりが持てないことが一般的である。自分が傷つくことを恐れる、相手を傷つけることを恐れる。いじめ社会の下で育ち、学んできた学生たちが社会性として身につけた処世術である。相互贈与の関係に立てない。そのような関係を作り変えていこうとする、社会力の方向には行かない。そのような力を体得する機会が保障されてこなかったからである。いじめの原因になっている相互比較の中で育ってきた結果である。

生来、乳幼児期の子どもは、相互比較をしないという研究がある。自分に足りない部分は、優れた仲間から学ぶという生き方をしているからである。当然だろう。比較して、優越感に浸ったり、自己卑下に陥ったりしても、何も生まれない。優越感に浸ることで意味のない時間と精力を消費する。逆に、自己卑下に陥ることによって、同じく意味のない時間と精力を消費する。自己卑下の場合、自己肯定感を抱くことのできない自分を支えるために、さらに時間と精力を使うことになる。これは意味のない消費ではない。必須の作業であるとはいえず、本来的自己を生きるために時間と精力を使うことが「現在を最もよく生きる」姿である。

大学教員の仕事は、そのような学生に対して、時代や社会に対する認識を育てることを通して本質的な理解が生まれることを支援することである。いうならば、自他の比較を通して相互の成長に活用するという発想へと転換させることである。無意味な時間と精力の消費を避けて、賢明な活用法を考え、行動する。比較することはしたくないことであるという文化を根付かせることである。山田玲司『非属の才能—みんなとちがってよかったね』（光文社、2007年）のような生きかたを紹介することも必要となる。

その意味からすれば、筆者が大学教員としてなすべきことは、逆説的な言い方になるが、自己肯定感が乏しい学生、学力面で困り感を抱えている学生、親子関係や人間関係で課題を抱えている学生、等が優先的に対象となるということである。研究大会への参加は、正規の授業時間以外に、研究発表ごとに30時間以上は関わっているからである。彼女たちに研究と絡めて関わる時間が欲しい。

以上の項目に関して全く問題がない学生はいないけれども、相対的に困り感の強い学生を対象とすることが大学教育の質保証の一環としての自主ゼミに値するのだろう。学生支援活動としての補修授業という仕組みはある。よろず相談としての学生相談という仕組みもある。より深刻な、専門的な支援が必要な事例については、心身健康面と絡めつつの対応がとられてきてはいる。さらには、チューターとしての役割の一環としての部分もある。

そのような重層的な関わりの中で授業担当者としての教員の役割の部分で言えば、教員としての授業との関わりの中で一連の課題を解決する支援を意識的に行うことである。清水が為しえたことは、基本的に授業やゼミに関わってのことであった。また、それが教員が専門的に為しうることである。

6. 「武器という教養」 滝本哲史（『武器としての決断思考』海星社、2011年）は、「無力なゲリラである若者たちが、自分たちが弱者である日本社会というフィールドで戦えるように、『武器という教養』を配る」（10～11頁）ために「意思決定の方法」を身につけるための、徹底した「自分で答えを出すための思考法」を提示した。大学教員でもある滝本は、相対する学生の実態を踏まえ、大学教員としての責任を果たす所業を為し続けている。顧客としての学生感覚ではない。

「正解がない」からこそ、現時点での「最善解」を導き出して、行動するという、生きた主体としての学生像をめざすからである。

滝本と時代・社会認識を共有するならば、大学教員としての授業は、滝本が実践しているようなものとなる。筆者的に言えば、批判読みという読み方の手法であり、価値選択の主体性の形成という観点からの日常生活の過ごし方であり、当事者性を大事にする姿勢である。そのような観点を重視した授業展開であり、評価の手法であり、評価を基にした次元をより高めた指導の展開である。

なかでも筆者がより大事にしているのは、各自の足跡を辿る過程から自分の将来を見つめるという手法である。担当する教育実習指導では、実習目標欄に記載する事項として、何ゆえに教職をめざしたか、これまでの実習で何をどう学んだか。今回の実習では何を、なぜ求めるか、等を記載させる。自己形成史や生育歴という、これまでの足跡のなかに自分の将来の道が見える。足跡は自分自身の選択の結果である。創られながら創る存在としての自己理解であり、社会理解である。客観的な理解に基づき、主観的判断をするためである。選択を重ねるなかで人はより個性になる。自他の比較を超える。自分の道が見えてくる。振り返りの質が確かな進路開拓に繋がる。

7. 実習と授業との往還 一つ一つの学びの時空を大事にする。研究大会参加効果が保育学生集団にも波及するような雰囲気作りをすることである。

授業や実習、実習報告会、卒業論文の発表会等、それぞれの教員が担当する科目と、間接的に関わる分野とで保育学生と共に学び育つ時空を創造する同志になり続けることである。

付記—短いおわりに代えて

小文は、本学教職センター長今崎浩教授からの依頼によって成った。研究大会参加報告書を熟読され、学生のすばらしさにあらためて感嘆されたことが契機になっている。小文が、その思いをどれだけ受けとめたものになっているか。

報告した学生自身がこれまで同様のすばらしい学びと育ちを体現し続けることに勝るものはない。その姿が感化力を持つだろう。さし当たって、それぞれの研究に継続的に取り組むことである。二つの研究は、保育学生としての自己形成が主題である。それはまた、教員のそれでもある。両者が共に学び育つ時空を創造するという趣旨そのものである。筆者もそれを期待している。

なお、小文において筆者が認めた部分は、全体の2割程度である。研究学生のお名前は、それぞれの資料に記してある通りである。筆者は、学生が書いた文章を経験差分ほど超えているだろうか。小文を契機に次なる学び育つ時空が生まれ、より多くの人びとが時空を共にできるようになることを願っている。（以上）